

本部だより

●第50号



マーシャル方面遺族会

<http://mibfa1926.com>



携帯サイト

●発行日：令和6年8月1日 ●発行人：高林芳夫
●本部：181-0012 東京都三鷹市上連雀8-7-8
●電話 & FAX：0422-77-8557 ●編集人：鈴木千春



マーシャル諸島慰霊友好親善訪問団 主催・(一財)日本遺族会
令和6年3月2日～3月10日

ごあいさつ

高林芳夫

皆様いかがお過ごしでしょうか

4月7日、61回目の慰霊祭を行いました。今年は3月下旬から肌寒い日が続き、靖國の桜もこの日に合わせて満開となり、まさに春爛漫。全国から80名近い会員が参列されました。小学6年・中学・高校・大学生と次世代を担う若者の姿が多数見られ、心より感謝申し上げます。

総会の後、日本防衛の最前線で活躍された元空将織田邦男様の講話を頂き、テーマは「先人の守り」でした。その一端を紹介します。

「先の戦争で日本軍の将兵が、特攻や突撃という最後の手段を決行、多くの若者の命が失われました。現在、外国が日本への侵略を恐れているのは、近代兵器は勿論ですが、最も大きな抑止力は、先人が行ったこの特攻にあります。日本人はいざとなったら何をするかわからない、それが怖くて、侵略への大きな抑止力となっています。私たち日本人は今でも、特攻隊の遺産で守られているのです」

学校の授業では聞けない貴重な講話でした。

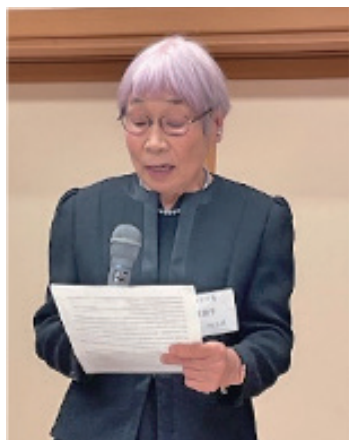
慰霊祭は厳粛かつ盛大に行われ、先人のご冥福と感謝の誠を捧げ、無事に終了する事が出来ました。

令和6年度 第61回 慰霊祭・総会 報告

令和6年4月7日(日) 靖國神社にて、
慰霊祭・総会が開催されました。

■総会

- 一 開会の辞
- 一 あいさつ
- 一 活動報告
- 一 会計報告
- 一 会計監査報告
- 一 今年度行事予定
- 一 その他
- 一 閉会の辞



藤田さん

- ・司会・清水副会長より挨拶、山村副会長を議長に指名。
- ・議長・山村副会長が開会を宣言。
- ・高林会長に続き、朝香名誉会長、大給相談役、安細篤志会員よりご挨拶をいただいた。
- ・会長から活動報告。
- ・会計・保延副会長より会計報告。
- ・監事・吉田氏より「会計は適正である」との監査報告。
- ・会長より今年度の行事予定の説明。
- ・青年部・古田部長のご挨拶
- ・藤田朋子氏より現地慰霊の報告。(内容は本誌7ページに記載)
- ・議長より閉会が宣言され、総会は終了。

■講話

元空将・織田邦男様より講話をいただきました。



織田さん

■写真撮影 隣室で集合写真を撮影

■慰霊祭 12時 昇殿参拝

1階の参集殿に移動し、朝香名誉会長、高林会長、玉串奉奠者を先頭に拝殿へ向かい、お祓いをうけました。朝香名誉会長が祭文を奏上され、玉串奉奠者とともに全員が参拝し、慰霊祭は無事に終了しました。



慰霊祭参加者 79名 (敬称略・五十音順)

朝香誠彦 朝香貴子 安細和彦 安藤としえ 池田幸夫 石澤洋子 居戸和由貴 井上賀彦 内海淑子 大給乗龍 大給三枝子 小田原利子 小田原 豊 小田原真由美 小田原由樹 織田邦男 河崎仁衛 河崎颯太 川田吉江 川田真実 黒澤みどり 黒澤亮介 小室洋子 小室貞男 齊藤玲子 齊藤幸生 齊藤好香 坂元典子 佐藤 勉 佐藤知子 清水雅尚 鈴木千春 高林芳夫 高林正子 田邊順子 富岡滋子 中村佳子 中村起也 中村優里 山中裕子 山中秀樹 長屋綾子 長屋政喜 長屋ゆり子 長屋裕太 長岡正昭 長岡昭子 服部政久 馬場 清 浜田つき子 浜田悦子 浜田一輝 浜田真一 浜田誠二 浜田房枝 浜田祐市 藤田朋子 古田誠一郎 北條勝成 北條孝雄 保延 務 松江孝枝 眞鍋公代 眞鍋信一 間々田征史 間々田邦子 間々田宏志 森 美希 森 千啓 森 龍啓 山村一郎 山田二美 吉田正明 米林義昭 米林美智子 若狭かつえ 若狭京子 若狭良太 和田一郎

直 会 (懇親会)

昇殿参拝後、希望者はアルカディア市ヶ谷「翠」に場所を移しました。お食事をいただきながら親睦を深め、15時20分頃お開きとなりました。



内海さん

吉田さん

直会 参加者 37名 (敬称略・五十音順)

池田幸夫 石澤洋子 内海淑子 織田邦男 河崎仁衛 河崎颯太 黒澤みどり 黒澤亮介 小室洋子 小室貞男 齊藤玲子 齊藤幸生 齊藤好香 佐藤 勉 佐藤知子 清水雅尚 鈴木千春 高林芳夫 高林正子 富岡滋子 中村佳子 中村起也 中村優里 長屋綾子 長屋政喜 長

屋ゆり子 長屋裕太 馬場 清 古田誠一郎 保延 務 松江孝枝 森 美希 森 千啓 森 龍啓 山村一郎 吉田正明 和田一郎

慰霊祭のご感想をいただきました

慰霊祭に参加させていただき感謝

富岡滋子さん(兵庫県)



井内忠義命
徳島県麻植郡川島町
(現 吉野川市)
陸軍海上機動
第一旅団司令部付
1944年2月24日戦没
(27歳) ブラウン島

戦死した伯父・井内忠義は、父きょうだいの長兄です。父世代が皆他界した時、遺された世代の責務と感じ、祖母や父たちへの供養の思いもあり、昨年貴会に入会しました。

桜満開の快晴の中、初めて総会、慰霊祭と直会に参加しました。昨年7月永代神楽祭に参列した折り、高林様、米林様はじめ皆様に温かく迎え入れていただいたことが嬉しく、慰霊祭には是非参加を！と思っておりました。

当日、想像以上に多くのご遺族の方々、遺児世代のみならず、次世代の方々も参加しておられ、改めて戦後79年経てもご遺族の深い悲しみ、そして平和を願う強い思いをひしひしと感じずにはいられませんでした。

特に戦争遺児の藤田様の現地慰霊の旅のご報告では、お生まれになる前に戦死されたお父様への思いを伺い、ご遺族の戦後のご苦勞や、お父様の眠る地で慰霊されたお気持ちに思いを馳せ、涙がこみ上げました。

元空将の織田様の講話も印象深く、不安定な世界情勢の中、平和への努力が必要であることを痛感しました。

靖国神社は幼い頃、亡き祖母と訪れた思い出深い場所です。昨今は上京の度に伯父の慰霊に訪れ、いつも身の引き締まる思いで参拝しています。今回は遺族会の皆様との参拝で、格別の思いで胸が熱くなりました。伯父の魂にまた少し近づけた気がしました。きっと伯父も、亡き祖母や父たちも喜んでくれていると思います。

直会では、さらに沢山の方からお話を

伺えました。思いがけず同じブラウン島で戦死されたご遺族・池田様にお会いでき、伯父の生きた証に近づいた思いがし、ありがたいことでした。

伯父は満州にて陸軍関東軍 第三独立守備隊司令部無線通信班の一員として従軍。昭和18年12月14日に海上機動第一旅団司令部付として釜山を出発、トラック島を経由し、翌19年1月4日にマーシャル群島ブラウン島着、2月24日、28歳の誕生日直前に戦死しました。遺骨は今も帰ってきていません。前年8月に結婚したばかりでした。

これからも、皆様と共に、慰霊と平和への祈りを続けたいと思います。

久しぶりの慰霊祭

池田幸夫さん（神奈川県）



寺西正俊 命

富山県西礪波郡幅野
田尻（現、南砺市）
陸軍 山砲部隊
1944年2月24日戦没
（31歳）ブラウン環礁
エンチャビ島

30年振りに参加させていただきました。前回は、祖父・寺西正俊の50回忌に

当たり、節目の年という事で参加させていただきました。この時も4月で桜が満開だったのを覚えています。厳粛な中にお互い遺族同志、相互扶助するような雰囲気の中、英霊に接するという体験をさせていただきました。

私は毎年、2月から3月に、実家の富山県の祖父の墓に墓参りしており、今まで靖国神社での慰霊祭は気に掛けておりませんでした。が、祖母、母の遺品、日誌を読み返すと、大変気に掛けていたことがわかり、私もいつか戦地のブラウン環礁エンチャビ島に慰霊に参りたいという思いが、年毎に強くなり、今回の慰霊祭参加となりました。30年前と変わらぬ雰囲気、懐かしさを感じております。

今回参加させていただき、祖父および祖父を含めた英霊の方々の尊い犠牲の上に、今日があること、安全安心な日々を送らせていただいている事を痛切に感じました。

今後も参加させていただき、英霊の恩に少しでも報いたいと考えているところです。

慰霊祭にて祖父を偲ぶ

中村佳子さん（千葉県）
（副会長・山村一郎氏ご息女）



山村武雄命

愛媛県
海軍航空隊752空(機関兵)
1944年2月6日戦没
(35歳) ルオット島
写真はミレ島基地に
駐在時、1942年当時

父方の祖父、山村武雄は海軍航空隊752空所属の機関兵で、昭和19年2月6日にルオット島で戦死しました。私の父、山村一郎は、2003年1月に同島に慰霊の旅に行き、その時のことや祖父の事を色々と話してくれました。

母方の祖父も東部ニューギニアで戦死している為、私にはおじいちゃんと呼べる人はいません。悲しいと言うより、祖母達や父母が大変苦労してきたと聞かされていたので、小さい時から祖母達や父母を大事にしないといけないと思う思いがありました。

父母も高齢になり、祖父達の供養を引き継いでいかないといけないと思い、去

年私もマールシャル方面遺族会に入会いたしました。

そして今回、初めて主人と高校三年生の娘と、満開の桜の中、靖国神社を参拝し慰霊祭に参加しました。（大学四年生の息子は、今回は欠席）。主人は本殿まで参拝させて頂いたことをとても感動しており、娘も悲惨な戦争の話聞かせて頂き、知らない時代のことを知れて良かったと話しております。

私は、若い方達の参加が多くて驚きましたが、高齢の父に代わって今後も祖父の供養を引き継いでいかなければならないと、強く思いました。直会では、人見知りで余り交流できなくて残念な思いもあります。また参加させて頂きたいと思っております。

戦死した祖父達やご先祖様のお陰で、今私達が生きていられるという感謝を忘れてはいけないと言う事と、次の世代にも伝え続けていくことが大切だと感じ、有意義な慰霊祭でした。ありがとうございました。

和田一郎会員より、ご寄稿いただきました

秀夫伯父

和田一郎さん（東京都）



三ツ木秀夫命

東京市麹町区
第6潜水艦基地隊
海軍主計大尉
1944年2月6日戦没
(24歳)
クエゼリン島

三ツ木秀夫伯父（母の兄）は、1919年12月2日に生まれ、1942年3月に大学を卒業して第一銀行に入行した。

その後、その弟・正次伯父の手記によれば（以下、「」内は同様）、「兄、同年9月30日、海軍主計見習尉官、海軍経理学校（築地）入校、補習学生（第9期第19班）。「1943年1月15日、海軍主計中尉」。「同月28日、卒業式に先立ち、同期5名と共に諏訪丸にて九州三池を出港、サイパン島経由、第6潜水艦基地隊（クエゼリン島）に赴任。出発の朝、父はただ一言『ウム』、レコードの軍艦マーチを背に家を出る兄とともに母と2人で、東京駅まで見送り、別離の情去り難

く、先回りして横浜駅にて列車の到着を待ち、その停車中、窓越しに別れを告ぐ。」「1943年1月30日、第9期生卒業」。

職業軍人であった祖父は、第二次大戦が始まった時点で、この戦争は負ける、と親しい人には語っていたとのことで、秀夫伯父を見送った時の気持ちが察せられる。

クエゼリン島赴任後も、秀夫伯父と家族との間には郵便の往復があり、頼まれてテニスのラケットを送ったこともあったとのことである。

秀夫伯父は1944年2月6日、クエゼリン島で戦死した。満24歳。海軍主計大尉、正七位。

1944年12月7日、「兄の葬儀を自宅にて挙行」、「大久保鼎湖氏が遺徳を彫り込ませた銅板1枚、骨壺に入れる」。「クエゼリンより送られた兄の軍用行李を見る、内地転勤の内示ありしか、玉碎を覚悟してのことか、知るよしもなし」。伯父の実家には、1945年4月4日、B29が投下した爆弾が庭に落ちたが、家にいた母と祖父母は、食堂で布団をかけ

たテーブルの下に居て九死に一生を得た。しかし家は全壊後全焼し、秀夫伯父からの軍用行李も焼失した。

千島ヶ淵戦没者墓苑拝礼式

保延務

令和6年5月27日、厚生労働省主催による拝礼式が挙行されました。今年は皇族として秋篠宮皇嗣同妃両殿下がご臨



席されました。戦没者御遺族は300名、各界からの来賓合わせて約500名が参列されました。参列者一同 国家斉唱のち、厚生労働大臣が式辞を述べ納骨を行いました。次に皇宮警察音楽隊の厳かな演奏のなか秋篠宮皇嗣同妃両殿下がご拝礼をされ、続いて内閣総理大臣、遺族代表、関係国駐日大使、衆院議長、衆参の厚労委員長、外務、環境、防衛の各大臣、各政党代表、各団

体代表、厚労大臣が花を献じました。その後、参列者一同が拝礼を致しました。本年は硫黄島、マリアナ諸島、ロシア等で収容した301柱のご遺骨を新たにお納めいたしました。これにより千島ヶ淵戦没者墓苑の御遺骨は合わせて3万700柱になります。当会からは、高林芳夫会長、米林美智子、鈴木千春、和田一郎、保延務の5人が参列し拝礼をいたしました。

新入会員 (戦没者との続柄・島名)

山浦邦子様	東京都	姪	クエゼリン島
下野敦史様	石川県	大甥	ミレー島
吉村靖子様	広島県	子	ウエーク島
北原 厚様	埼玉県	子	ウオツゼ島
太田智明様	長野県	孫	クエゼリン島
相川健一様	千葉県	甥	クエゼリン島
(故・相川孝夫様より継承)			
番場 守様	東京都	甥	クエゼリン島
(故・番場信子様より継承)			
松尾綾子様	東京都		
(故・松尾正輝様より継承)			

ご入会ありがとうございます。

訃報

高橋梅子様 新潟県
番場信子様 東京都
相川孝夫様 千葉県
松尾正輝様 東京都
本保美恵子様 新潟県
謹んでお悔やみ申し上げます。

寄付者 御芳名（敬称略）

二万円 高林芳夫・富岡滋子・富田キミ・
橋本勝彦・浜田つき子
一万円 朝香誠彦・大給乗龍・保延 務・
吉田正明・諸橋恒一・古田誠一郎・平
野裕美・酒井則夫・蜂屋安里
七千円 黒川正文・川端堅太郎・上村秀
樹・西田寿子・坂本公洋・長岡俊夫・
藤田洋子・石川正興・山口良二・奥井
國夫・渡辺美枝子・番場 守
六千円 小室洋子・渡部 守
五千円 長屋綾子・佐藤 勉・宮城 勇・
福永弥生・内海淑子・井上賀彦・小林
すみ子・黒澤みどり・齊藤玲子
三千円 小山浩二・米林義昭・安藤よし

え・安藤正子・清水雅尚
二千五百円 吉原太郎

二千円 三好茂勝・高坂和靖・山田昭雄・
下釜正義・原田記子・山本敏夫・植田
和明・廣島正光・大山節子・千田啓子・
白方勝彦・宮下勤子・吉村靖子・西岡
純一・中澤秀夫・鈴木裕子・山浦邦子・
太田智明

千五百円 馬場 清・石澤洋子・鈴木千
春・山村一郎・小田原利子・河崎仁衛・
大井和子・佐藤知子

千円 間々田征史・和田一郎・居戸和由
貴・山田二美・藤田朋子・北條勝成
五百円 藤原和子・安藤正也

（2024.5.28現在）

※合計四十万三千五百円のご寄付を頂き
ました。心より感謝を申し上げます。

※お詫びと訂正

第48号 寄付金の欄
鈴木友希子様の希の字が間違いました。
（正）鈴木友季子様 です。
お詫びして訂正します。

未納会費 納入のお願い

会費未納者は24名です（5月11日現在）。お忘れになっている方は、納入をお願いいたします。

令和5年度 戦没者遺児による
慰霊友好親善事業 現地慰霊報告

令和6年3月に日本遺族会主催の現地慰霊に行かれた藤田朋子さんにご寄稿いただきました。

現地慰霊の感想

藤田朋子さん（埼玉県）



佐藤 清命
茨城県
海軍第六根拠地隊
司令部
1944年2月6日戦没
(33歳)
クエゼリン島

父・佐藤 清は、マーシャル諸島クエゼリン島で昭和19年2月6日に玉碎しました。横須賀の第六根拠地隊司令部に昭和16年12月11日出征して、6日目に生まれたのが私です。



ロッキン内 (高林会長提供)

生み月のお腹を抱えた妻と2歳の息子を
を残して、どんな気持ちだったか？ と
想像するだけで胸が締め付けられます。
戦争さえなかったら！ 父が生きてさ
いてくれた
ら！ と、
何度思った
事でしょう。
戦後、母
が父の弟と
再婚したこ
ともあり、
余り父の事
は触れず
成人しまし
た。現在は
父を知る人



以降、藤田さん提供写真



マーシャル方面遺族会が建立して下
さった慰霊碑の前には赤い鳥居。



慰霊碑前の鳥居

も皆、天国に旅立ち、このままではあま
りにも可哀そう。自分が元気なうちに是
非父の戦死した場所を訪れてみたいとい
地図とにらめっこしておりました。
しかし、個人ではどうしても無理なこ
とが解り、日本遺族会の「戦没者遺児に
よる慰霊友好親善事業」を知り、申し込
む事4年目によく念願が叶い実現出
来ました。(その間コロナで中止)
今年3月2日〜10日迄、団長さん以下
18名でグアム経由でクエゼリン島へ。

茨城県から取り寄せた立派な石で慰霊
碑が建てており、碑には各都道府県から集
めた銘石を嵌め込み、日本地図が作られ、
裏には戦没者の冥福をお祈りする銘が刻
まれておりました。碑の中にはマーシャ
ル方面での戦没者全員の氏名が書かれた
霊聖簿が永久保存されているとの事です。
建立作業は、現地の方々が勤務を終え
てからボランティアで行って下さったと
聞きました。そこは島でも静かな場所
で、今から約55年も前に建立されたとは思
えない程、綺麗に清掃されていて管理
が行き届いており、頭が下がりますと共
に感謝の気持ちでいっぱいでした。
現地慰霊祭は、事前にテントを張り、
椅子も用意され日本・マーシャル諸島・
米国の国旗を掲げ、祭壇を設け、お花や
果物も飾り各自が持参した日本のお水・
各地元のお米・お酒や嗜好品等をお供え
し、追悼文を読み上げお線香を手向けま
した。
日本大使館・軍関係者、そしてお手伝
いして下さった方達もお参りして下さい
ました。
初めての参加でしたので、ここ迄丁寧



2024.3.8
全戦没者追悼式

以前からも館の方達・戦没者追悼式」を大使府建立の慰霊碑で「全戦没者追悼式」を大使館の方達・



ヤマモライネコさんと
(高林会長提供)

じ様に丁寧
に執り行い
ました。

マジュロ島では、今回訪問出来なかつたギルバート諸島のナウル島とマキン島の慰霊祭を、島民も協力して下さり、同

ゼ島へ。
マジュロ島からチャーター機でウオツ
当に父の眠る場所に自分は確実に立って
いるのだという実感が湧きました。



に慰霊祭を
執り行つて
下さる事に
感激で胸が
熱くなりま
したし、本



竹之下和雄様

昭和16年生まれ 本籍・鹿児島
昭和37年 厚生省入省・援護局
平成12年 退官 退官後、公益財団法人
中国残留孤児援護基金に65歳まで勤
務、現在は一般社団法人日本戦没者遺
骨収集推進協会の専務理事

竹之下和雄様

特別インタビュー③ 最終回

鈴木千春

お世話になっております「山村稲子さ
ん」もご参列下さり、執り行われました。
現在は、海の綺麗なサンゴ礁の穏やか
な島々です。父達はこの島で故郷を思
い、家族を思いどんなにか日本に帰りた
かったことでしょう。
子供として父に何も出来ずにおりました
が、今回の訪問で本当の意味でのお墓参
りが出来たと思っております。

※日本遺族会主催の戦没者遺児による慰霊友好
親善事業・現地慰霊は今和7年度で打ち切り
となります。



マジュロの慰霊碑前で
(高林会長提供)

〈前回の続き〉昭和48年、日本政府は船
での遺骨収容団を派遣しました。竹之下
さんに当時の貴重なお話を伺いました。
今回が連載の最終回です。

●印象的だった島は

マロエラップ島の遺骨が不可解でし
た。将棋の駒のような形の墓石のそば
に、大きなタンクが丸ごと地面に埋まっ

ていました。蓋があいたままのタンクの口だけ地表に出ているのです。一人がやつと入れるサイズでした。中は真っ暗で、有毒なガスが発生しているかもしれないと、私が先にローソクで調べ、懐中電灯を持ってゆっくり中に入りました。スコールの水が溜まり、たくさんのお骨がありまして。まず水を先に出そうと、骨を踏みつぶさないよう降り、ロープを使ってつるべ式にバケツリレーで水をかきだし、そのあと遺骨を出しました。驚いたことにすべて頭蓋骨しかなかった。首狩り族じゃあるまいし、なぜ頭部だけなのかわかりません。体は海に流したのかもしれないですね。

●最終地、ミレ島はどんな様子でしたか
ミレは戦友会の参加人数が多いので、二手に分かれました。一方は、ミレ本島の飛行場爆撃で80人戦死しているからと、そちらにかかりきり。もう一方は、島伝いにずっと骨が並んで「白骨街道」になっているエリア。私は後者の別動隊として、戦友会の堀部さん（当時五十代）と二人で島伝いに浅瀬の海をジャブジャブ歩いて渡り、白骨街道の収容にあたりま

した。広範囲なので、いちいち船に戻れないため、野宿しながら遺骨を捜索することになりました。手伝いの島民も私たちと一緒に地面にゴロ寝する生活です。最初は村長（父が日本人）宅に一泊し、ヤシでふいた穴だらけの天井のスキマから満点の星空を眺め、堀部さんから戦時中



海岸で焼骨。やぐらの上に立つのが竹之下さん

の話聞いていました。戦友会の中で「この村長の父親は海軍の●●さんじゃないか」と噂されていたが、真相はわかりません。

●現地でのトラブルは
困ったことに、我々の食料として持ってきた3日分の「米」を村長の母親に渡したところ、言葉が通じず一度に全部を炊かれてしまった。さらに刻みコブラをまぶしたおにぎりにされ、甘くてニオイもあり、日本人には食べられないモノに

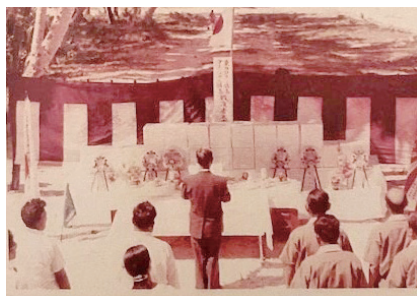
なっていました。

想定外の事態で食料がなくなり、途方にくれましたが、村長には9人も子供がいたので、コブラおにぎりは全て子供にあげることにしました。私たちに残ったのは少しの缶詰だけ。このまま収容を続けるのは不安でしたが、「何とかなるよ」と自給自足覚悟で先に進みました。

●食料の調達はどうされましたか

堀部さんが戦時中、漁労班※だったそうで、ネズミの捕り方、食べ方を教えてくれました。

ネズミは割れたヤシの中のコブラを食べにきます。まず、近づいたネズミを棒で叩いて気絶させる。首の皮を切って、皮をひっくり返してハラワタを取って海で洗います。「昔はこうやって食べたんだ」と堀部さんは手慣れた手つきです。ヤシの葉を竹串がわりにして、両足から肩のほうへ十字に串刺しにして焼いて食べました。鶏のささ身のちょっと渋みのある味でした。他にも、若いヤシの木はタケノコみたいで美味かった。私は胃腸が強いのか、一度もお腹こわしたことはありません。



現地で慰霊祭

最終的に、島民の小型船を3隻借りて、内海に停泊中の船まで、カゴいっぱい骨を運び、ミレ本島で焼骨し追悼式を行いました。ずっと野宿しながら遺

骨、ミリ環礁のタカイワ島で、アジを食べて20人死んだという証言がありました。きつとそれは、魚の毒ではなく、栄養失調状態であわてて食べたからではないかと思います。

●遺骨の運搬は

島の長い一本道、道伝いにずっと遺骨が続きます。戦中、飢餓状態の島での悲惨な話ばかり聞きましたが、遺骨は将兵が斃れていったままの姿でした。進むほどに、用意したカゴはすぐに骨でいっぱいになります。すると島民が（ヤシの葉で）器用にカゴを編んでくれて、それに骨を入れていきました。

骨収容したミレ島は、とても印象深かったです。

●いよいよ帰国ですね

マジュロやポナペで関係機関へ挨拶を済ませ、やっと日本へ帰れる！というときにオイルショックが起きました。東京ではトイレットペーパー買いだめが起きていると、船のテレックスでニュースが入りました。ポナペを出た我々の船は、次の寄港地サイパンで燃料補給をすることになっていました。現地で「アメリカ国籍以外の船には給油しない」と報道があったのです。これは大問題。船舶無線で現地に交渉してもまったく聞き入れてもらえない。頭をかかえました。

燃料の残りをみて、船長から「みんな！我慢してくれ。今まで11〜12ノットだったが一割減速すれば燃費を二割節約できる。速度が遅くなる分、帰国まで1日増えるが、給油してもらえなければ仕方ない。これより3日間エアコンも切る！」

赤道近くを航行する灼熱の船。とくに居住区は船底です。石油のニオイと魚の腐ったニオイで蒸し返っています。とてもじゃないが部屋にいられないとみんなデッキに上がりました。さらに船内の電灯は半分になり、暗くて暑くてノロノロ運転です。劣悪な環境に、みなイラ立っています。このままではどうしようもないため厚生省に連絡、ペンタゴンを通じてサイパンに連絡し、「特別にこの船には給油するように」と交渉してもらいました。3日目にやっと返答がきて、クラーがついた瞬間、みな「バンザイ」を叫びました。

●不便な時代に不便な場所での遺骨収容のご経験、すごい冒険談ですね。

そうそう、ホントに冒険でした。私も若かったし、貴重で面白い経験をさせてもらいました。とにかく無事に遺骨を日本に連れ帰ることができてよかったです。その後マ会の浮田さん宅に伺ったとき、今回の報告を会報「環礁」にと、一所懸命作成しておられましたよ。

●貴重なお話をありがとうございました。

※飢餓状態になった島で、魚を獲るなど食料を調達する役割



第61回マーシャル方面遺族会慰霊祭 令和6年4月7日 於 靖国神社

※事務局へのご意見・ご感想、投稿記事、マーシャル関連情報などお寄せください。

お問合せ先 事務局・高林 048-223-6110 携帯090-3337-4531 メールアドレス takabayashi.yoshio@khaki.plala.or.jp